様式第７号（第４－４－(1)関係）

令和７年度第１回ふじのくにユニバーサルデザイン推進委員会
会議録

日　　時	令和７年６月16日(月)　　午後１時30分から午後３時30分まで
場　　所	静岡県庁　別館７階第４会議室C（オンライン併用）
出 席 者 職・氏名	委員 小濱 朋子（静岡文化芸術大学）【委員長】 ヴォ・ティ・ホン　（静岡県国際交流員） 竹内 智美（株式会社竹屋旅館） 竹島 恵子（公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団）【委員長代理】 鳥原 久資（特定非営利活動法人メディア・ユニバーサルデザイン協会） 生川 友恒（静岡大学） 藤原 龍美（一般社団法人静岡県建築士事務所協会） 森川 美和（公益財団法人共用品推進機構） 山本 忠広（NPO法人清水障害者サポートセンターそら） 事務局 くらし・環境部県民生活局長　鈴木 孝子 くらし・環境部県民生活局県民生活課長　白鳥 直子
議　　題	１　第６次ふじのくにユニバーサルデザイン推進計画の進捗状況について ・「第６次ふじのくにユニバーサルデザイン推進計画」の進捗状況（評価書案） ２　次期ユニバーサルデザイン推進に係る計画の策定について （１）次期計画策定にあたって（方針等） （２）次期計画骨子案及び指標案
配布資料	・資料１－１　ふじのくにユニバーサルデザイン推進委員会名簿 ・資料１－２　ふじのくにユニバーサルデザイン推進委員会設置要綱 ・資料２－１　第６次ユニバーサルデザイン推進計画（概要版） ・資料２－２　「第６次ふじのくにユニバーサルデザイン推進計画」評価書案 ・資料３－１　次期ユニバーサルデザインの推進に係る計画の策定方針案 ・資料３－２　次期計画　骨子案 ・資料３－３　次期計画　指標案 ・資料３－４　令和６年度県民意識調査結果 ・資料３－５　意見交換テーマ ・資料３－６　これまでの計画における指標の変遷 ・参考資料１　「第６次ふじのくにユニバーサルデザイン推進計画」関連事業の実施状況 ・参考資料２　第６次ふじのくにユニバーサルデザイン推進計画 ・参考資料３　次期総合計画概要 ・参考資料４　次期計画御意見一覧表

１　審議事項

（１）第６次ふじのくにユニバーサルデザイン推進計画の進捗状況について（資料２－１、２－２）

・「第６次ふじのくにユニバーサルデザイン推進計画」の進捗状況（評価書案）

（２）次期ユニバーサルデザイン推進に係る計画の策定について（資料３－１～資料３－６）

・次期計画策定にあたって（方針等）

・次期計画骨子案及び指標案

２　審議内容

１　第６次ふじのくにユニバーサルデザイン推進計画の進捗状況について 「第６次ふじのくにユニバーサルデザイン推進計画」の進捗状況（評価書案） ２　次期ユニバーサルデザイン推進に係る計画の策定について 次期計画策定にあたって（方針等） 次期計画骨子案及び指標案

１　第６次ふじのくにユニバーサルデザイン推進計画の進捗状況について

（事務局の説明概要）

・成果指標は「困っている人を見かけた際に声をかけたことがある県民の割合」となっている。基準となる令和２年度の値が33.0％であるのに対して令和６年度の数値は39.3％となった。令和３年度以降、下降・停滞していたが、令和６年度には39.3％まで上昇した。ただ、その割合は全体の４割程度にとどまっている。今後の取組の方向性としては、引き続き第６次ふじのくにユニバーサルデザイン推進計画に基づく取組状況の共有や、県職員を対象とした講座の実施等により、全庁でのユニバーサルデザインの導入を着実に促進していく。さらに、講座や情報発信を通して相手の立場に立った思いやりの行動ができる人づくりに取り組んでいく。

・活動指標は、ハート、ソフト、ハードの３分野についてそれぞれ２つずつ指標を設定している。ハート分野の活動指標、ユニバーサルデザイン情報発信回数については、毎年度180回の目標を設定しているところ、令和６年度は266回となった。心のＵＤを促進する講座の実施回数について、小中学校等を対象とした出前講座、それから企業・団体や県職員向けの実践講座を開催しており、毎年度40回行うという目標のところ、令和６年度は42回実施しており、両指標とも目標を達成している。

・ソフトの指標については、１つ目の工業技術研究所によるユニバーサルデザインに関する研究開発技術指導及び相談件数は、334件と目標達成には至らなかった。行政手続のオンライン化対応済割合については、R5年度は評価区分が●だったところR6年度は○となった。

・最後に、ハードの県内乗合バスにおけるバリアフリー車両導入の割合については、計画策定時には目標値84.0％としていたが、令和５年度に目標を上方修正し、89.4％を目標としている。令和６年度の実績がでていないため、令和５年度の実績となるが、88.6％となっており、順調に進捗している。集約連携型都市構造の実現に向けた取組件数も、目標を累計360件としていたが、目標を上方修正し、累計410件と設定した。令和６年度は412件と順調に進捗している。

（小濱委員長）

質問やご意見などあったら手を挙げてお話いただきたい。

（委員）

質問・意見等なし。

２　次期ユニバーサルデザイン推進に係る計画の策定について

（事務局の説明概要）

・資料3-5の「１　次期計画策定方針について書きぶりの修正（報告）」について。事前に委員から御意見を伺う際にお送りしたものには、「県が主導するのではなく、県民一人ひとりが主体となってＵＤを推進していけるように、長期的なＵＤ推進を視野に見据えて策定。」と記載していた。その中で、「県が主導するのではなく」という文言について表現方法を変えた方がよいと言う意見をいただいたので、それを踏まえ修正を行った。具体的には、「県は、引き続きUD（ユニバーサルデザイン）を推進するための施策を展開していくとともに」と表記し、県がＵＤを推進していくなかで県民も自ら推進していくという表現とした。

・議題①次期計画策定方針（目指す姿）及び骨子案について、ユニバーサル社会と共生社会の違いや骨子案「１　静岡県が目指すユニバーサル社会」の中柱の表現方法等について御意見をいただいた。ユニバーサル社会の実現に向けた諸施策の総合的かつ一体的な推進に関する法律及び現計画から、ユニバーサル社会、共生社会の定義は以下のとおりであり、それを踏まえて、静岡県が目指すユニバーサル社会を定義した。

・静岡県としては、ユニバーサル社会を『年齢、性別、能力、言語、考え方など、人々が持つ様々な違いを認め合い、個性を尊重しつつ支え合うとともに、社会に参加し活躍できる社会』と定義し、その概念を次期計画に取り入れたいと考えるが、そのことについて御意見をいただきたい。

・定義の考え方は、法律では「障害の有無、年齢等」とされ、福祉の観点から主に障害者や高齢者を対象とした限定的な枠組みとなっている。静岡県としては、今までのユニバーサルデザイン推進を背景にして「年齢、性別、能力、言語、考え方」とし、より広義な概念として設定している。ユニバーサル社会は、人々が持つ様々な違いを認め合い支え合う共生社会に「社会に参加し活躍する」ことが追加された共生社会よりも一歩進んだ社会だと考えている。

・骨子案「１　静岡県が目指すユニバーサル社会」の中柱について。ユニバーサル社会は個性を尊重し共生する社会を基盤としながら、社会参加の機会が加わったもう一歩進んだ社会であり、そのような社会を実現するためのアプローチとしてユニバーサルデザインの理念の継承が重要であると考え、骨子案「１　静岡県が目指すユニバーサル社会」の中柱に、「個性を尊重し共生する社会」及び「ＵＤの理念の継承」を設定した。その中柱の表現方法について、県民にわかりやすく伝えるために、どのような表現が適切か伺いたい。

・議題②指標案の絞り込みについて事前に御意見を伺った中では、案１又は案３がふさわしいと答えた委員が多かった。議題①の静岡県が目指すユニバーサル社会を考えたときに、その成果を現すための指標について、案１、案３のどちらにするのが適切かという観点から議論をいただきたい。その際、県民向け調査における今後の質問の仕方や例示についても、御意見をいただきたい。

（小濱委員長）

分からないところも含めて、皆さんから意見をいただきたい。

（生川委員）

法律上のユニバーサル社会よりも幅広い考えの姿勢はいいのではないかと。今の社会は２年、３年でかなり変わって来ている。ダイバーシティインクルージョンの考えが矢継ぎ早に出ていて、取り入れていく必要があるのではないかと思う。

その一方で、今、社会の分断も進む中で、どう打ち出していくか問われているのかと思っている。定義を作るのは、すごく難しい。苦労して案を作られたなと思っている。後半の「社会に参加し、活躍できる社会」の「活躍できる」という言葉だが、この10年ほどで、行政の事業、あるいは行政から補助を受けた事業で、「多様な人が社会で活躍できる」という言葉が使われている。皆さんは、どんなイメージをお持ちか。なんとなく「就労」とか「就職してる」という印象に少し寄りすぎてしまうのではとよぎる。無意識のうちに「活躍する」イコール「就労」とか「生産性」と考えがちだと思うので、ここの表現を変えてもいいかなと思う。

元々、一億総活躍社会でちょうど今から９年前に安倍政権が打ち出したものだが、そこで人口を維持するために、若者も高齢者も女性も男性も、障害や難病のある人、一度失敗を経験した人も、みんなが包摂されるし、活躍できる社会というところで、ダイバーシティインクルージョンに近いような考えからできたと思っている。

「ひとりひとりの個性と多様性が尊重され、家庭で地域で職場でそれぞれ希望が叶い、それぞれの能力が発揮でき、それぞれ生き甲斐を感じることができる社会」とされるが、「家庭で地域で職場で」と、「職場」が一番最後になっている。おそらく当時の議論の中でも職場だけではなく、家族とか地域のことも全部活躍だということを指したと思うが、ＧＤＰを上げていくための数値目標になり、仕事と子育てを両立できる環境整備だったり、活躍できるイコール就労に行きがちなところがどうしても出てしまうので、そこは変えてもいいと思っている。

それから、「性別」というところ。ＬＧＢＴ理解増進法が制定されたが、ＬＧＢＴＱというのは性的マイノリティの人たち。ＳＯＧＩという言葉を耳にしたことがあるかもしれないが、これは、生まれながらの性別ではなく、好きになる性と心の性があり、これもセットで含めることがデフォルトになってきていると思う。

言語・文化・障害の有無などというところだが、そのあたりがいわゆる属性と呼ばれるもので、考え方は自分自身が持っているものということなので、それを個性と表現すべきなのかという議論、あるいは背景というふうに置き換えてもよいと思う。例えば、信条とか宗教とか考え方とかも入ってくるのかと。そういう違いを認め合っていって、自分の属性とか背景に誇りを持ちながら、自分とは異なる特性や背景のある人を尊重していく。

あともう一つ、「支え合う」というところで、双方向の関係、いろいろな人がいっぱいいるだけでなく、双方向の関係で支えあって公平な環境のもとで参加できる社会みたいな感じをイメージしているが、ぜひ他の委員の方に、私の意見にとらわれずいろいろな角度でご意見をいただければと思う。

（小濱委員長）

生川委員の、この議題に関する背景からお話いただいた。皆さんの背景に合わせたときに気になる言葉ということでお話いただければいいと思う。

（藤原委員）

建築のハード分野から出席しているが、建築の分野の中でいうと、ソフトの部分が私にとっては分かりにくい。その中でユニバーサル社会とは一体何だろうと。議題の中でユニバーサル社会というのは、いわゆる共生する社会である、最終的に共生社会は何だという話になると、利用しやすい建物や設備、製品やサービスが整った環境で誰もが自由に活動できるとともに、県民一人ひとりがお互いを

理解し思いやりのある行動ができる社会を目指すということになる。
　建築の分野だけ捉えると、とりあえずは、利用しやすい建物や設備を作ればそれでよいということになる。それが当たり前の話だが、当たり前の話を、もっともっと突き詰めていく必要があると思う。
　それから、もう一つの定義の考え方に関して言うならば、よく分からないと思った。ユニバーサル社会の言い回しがすごく分かりにくい。非常に、その通りだとは思うが、私にとっては分かりにくいと思った。

（小濱委員長）
　差別化するために、逆に難しくなっているのではないかというのは、私も同感する。分かりやすくするというのが今日の大きな仕事だと思う。そこを含めて、ご発言いただければと思う。

（ホン委員）
　最初のところで「年齢・性別・言語」とあったが、外国人の観点からは、国籍、宗教も入れていただければよいと思っている。ユニバーサル社会という定義も難しいと思った。そういうところも、やさしい日本語で分かりやすい説明ができれば、外国人も分かると思う。

（山本委員）
　障害のある方たちも千差万別で、感覚も皆さん違うので一概にまとめては言えないところはあるが、今回、障害とか高齢者を重点にするわけではなく、全ての人という意味で、なるべく誰が聞いても同じようにしていくとよいと思う。
　どうしても、当事者の中で、年齢が高い方だと、優生思想のことをすごく気にされていて、排除されてきたから、自分たちは仲間に入れてもらえないという思いが強い方もいらっしゃるし、その後、権利を言うことで、より言葉で強く自分たちをアピールするような時代にもなってきているところだと思うので、全ての方がやはり平等に同じようにという意味では、国の捉え方に限らず、県の言い回しで作っていけばよいと思う。
　骨子案の方は、「社会」という言葉が何回も繰り返されている。もう少し簡単にできるのではないかと思う。

（森川委員）
　全員が分かる言葉というのは、難しいのではないかと考えている。そのため、例えば、静岡県が考えて定義をされたのであれば、教育だとか、福祉だとかいろいろな場面において、それに応じた分かりやすい表現に変えていくのでもよいのではないかと考えている。
　今、活躍と言う言葉について話し合われているが、教育や福祉では活躍するということはどういうふうに捉えたらよいか仲間と話し合ったりして必要であれば使用すれば良いと思う。私はアクセシブルデザインや共用品という言葉を使っているが、当事者の方々、様々な方々と一緒にこの言葉をどういうふうに捉え使えばよいかと考えている。どういうふうにすればいいかという明確な回答はないが、そこまでこだわらなくてもよいと思っている。

（鳥原委員）

ユニバーサルデザインの話合いと言いながら、内容があまりユニバーサルデザインになっていない。簡単に本来表現できるのが、かえって難しくなってしまっていると思う。資料を読んだが、理解できなかった。ユニバーサルデザインという言葉を伝えよう伝えようとしているが、ゆえにそれが難しくしてしまっている感じがする。このままだと、定義を県民の方にお知らせしても、伝わらないのではないか。

何が足りないのかなとずっと読んでいたが、一番大事な「日常生活」という言葉がどこにも出てこない。ユニバーサルデザインというのは、日常生活に一番根付いているものなので、この部分があるだけでだいぶ変わってくるのではないか。それから将来にわたってというようなメッセージが一つあると、県民の方も今よりも先のことを考えるということで、思考がシフトできるのかなと感じている。

（竹内委員）

私も全然理解できない。今、平等や、誰に対しても、そのようなことに皆さんすごく神経質になっていて炎上やトラブルを回避するために、なるべく平たくどこにもとげのないようにしている。それとユニバーサルデザインは似て非なるもの。少し別で考えてもよいのではないか。

先ほど森川委員も言われたが、県が、そういうことを総合的に考えながら作ったものなので、これ自体は、とてもよくでき考えられているものであるとすれば、あと求められるのは伝わりやすさだけなのか。皆さんは毎日専門的にこのことをずっと考えて、どうしたらよいものができるかと作り込んできていると思うが、受け取るのは初めて見る県民なので、それと委員の皆さんはそれぞれ専門分野こそ違えど同じところにいるのではないか。

いただいた資料をチャットＧＰＴに読み込ませて、これを誰でもわかるように解説してみてと書くと、すごく柔らかい文章で返ってくる。今、子供にも分かりやすいように書いてみてと言ったら、「人はみんな年齢も性別も得意なことも考え方も違います。そんな違いを認め、助け合いながら誰もが安心して参加できる社会を作っていきましょうというようなことが、このメッセージは言いたい」ということらしい。もし高校生や子供、日本語がまだ得意でない外国籍の方とかシニアの方など、そういう人たちに届けるときにはもう少し柔らかくて分かりやすいものの方が同じ方向を向き合っている感覚を受ける。とげを取るというよりは、お互い向き合ってキャッチボールできるような資料になっていくとよいと思った。

（小濱委員）

総じて言うと、分かりやすさに欠けてしまっている。委員長ということを除いて、私も同じようなことを思った。私が授業で使ってる中で似たものがないかと考えたときに、ロン・メイスがユニバーサルデザインの定義をしたときに、建築にかなり触れている方なので、その言葉で言うと、障害者のための設計ではなく、万人が使える設計、障害者や高齢者、子供といった社会的弱者に対してその自立を妨げずに、公平に便利なサービスを提供できるということが重要と言っていて、私が授業のときに強調するのは、自立を妨げずに公平な便利なサービスを提供できるというところ。

あらかじめ全ての人にということで、ずいぶん日本では翻訳、解釈が広がってきたが、結局その目的というのは、自立したということだと思う。自立すると何がいいかというと、朝鮮戦争とかベトナム戦争などで負傷した兵隊さんたちが帰ってきて、そのときに、そのような人たちを福祉的に保護す

るか、またはその状況を整えるから税金を払うに働く側に回ってもらうかといったときに、アメリカは後者の方だった。暴力的な言い方だが、アメリカは平等に参加できるからみんなどんな人も働いてよねということになった。日本から輸入するもので、例えば読み上げとか、そういうことができないものは国が買わないということをやった。日本の企業は、このようなことになったら輸出ができないということで、日本にもユニバーサルデザインという考え方が広がっていったのが1990年、それでどんどんデジタル化していったというのがＵＤの歴史の中の大事な部分だとすると、活躍とは、何か頑張らなければいけないみたいで、参加とか、鳥原委員が言われたような日常生活で取り残されないとか、それぐらいのレベルから、「活躍」となると就労とか、納税などとかなり飛躍してしまっている。その点が言葉のわかりやすさと同時に考えるポイントかということを思った。

あともう一つは、ノーマライゼーションという考え方である。福祉国家である北欧の方で1959年の頃から、もう既に多様性を受け入れる社会のデザインとしてノーマライゼーションという考え方があり、私はいつもその考え方を必ずＵＤの話の前に持っていく。先ほどのアメリカのロン・メイスさんが言ったよりもずいぶん前からノーマライゼーションという考え方をしていて、それは障害者を排除するのではなく、障害を持っていても、健常の人と均等に当たり前に生活できる社会こそがノーマルな社会、こういう社会を実現するため取組をノーマライゼーションということで、ノーマライゼーションの社会というのは当たり前の生活というのはどういうことか、しっかりと定義付けられている。これ以上、何を望みますかというぐらい、日常で保障される日常生活っていうのが、1959年のあたりでもう既に整えられ、公言できていたから、目指す姿として整えられたんじゃないか。それが定義で説明しようとしていることなのではないかと思った。

皆さん分かりにくいということが分かったが、県はやはり一歩先を進むユニバーサル社会という表現を書きたいのだと言ったときに、どの部分は生かしどの部分を分かりやすくすべきか、またはこれはそのままで、ブレイクダウンするものが必要か。

（生川委員）

行政的な立場で考えると、間違った定義にならないように、どうしても文章が長くなっていく。その一方、学生たちはとてもピュアに感じる。授業で、共生社会とは何かを自由にコメントペーパーに書いてくださいと伝えたところ「人が社会に合わせていくのではなく、社会の方が多様な人に合わせていく」ということなど答えたりもする。

他のユニバーサル社会の定義は、結構難しく言葉がいっぱい並んでいるが、思い切って誰が見ても一目でわかる、という方向性で私もよいと思う。

（藤原委員）

考え方は、建築的な話をすると、誰もが簡単なんだよと、誰もが日常生活できるような形にしておくこと自身を絵に表せばいい。それを絵に書いて、自分がその絵の中を想像しながら歩く。どのように大変なのかな、車椅子の方がいらっしゃったら、これで使いやすいんだろうかと。そういうバリアを取り除くのが当然ユニバーサルの共通する社会。それを絵に表す。ただそれだけ。日常生活はバリアをなくした中で生活できるようなかたちをとるだけ。

ただ、今度は出来上がったとき、自立した日常生活もできるようになっていくと、今度は、何が足らなくなっているかというと、ハードだけではなくて、ハートの部分とソフトの部分が足りなくなっ

てきてしまうのではないか。

もう1点はユニバーサルデザインの言い回しが非常に難しいという話の中で私が考えたのは、県民の人たちが、この中では大概もうユニバーサルデザインとかみんな知ってるんだというような前提でこれを作っているが、本当にユニバーサルデザインっていう言葉を知っているのか、分からない人たちがたくさんいらっしゃるのではないかと思っている。

ユニバーサルデザインという言葉をもう少し丁寧に説明した中でこういうものを書いてくと、非常に分かりやすいと思う。

（ホン委員）

ユニバーサル社会の定義の第一印象は、すごく綺麗な日本語で書いていると感じた。でも文が長いと思う。一つの文で三、四行続いていて、私からしたらどこから理解すればいいかを、ちょっと悩んでいた。こういう綺麗な日本語は日本人にとってはいいのかもしれないが、この文も２、３文に分けて、もうちょっとはっきり短く言うことができるのか考えている。

例えば定義を、２文に分けると、「年齢・性別・能力・言語・考え方など、人々が持つ様々な違いを認め合う社会です。この社会で人々の個性を尊重しつつ支え合うとともに、だれでも社会に参加することができます。」とすると、もう少し理解しやすいかなと思っている。

（山本委員）

活躍という言葉が、外に出て活躍しなきゃならないと思うと少し重く感じてしまうかもしれない。自由に出入りできる、参加できるというようにしてもらった方がよいと思う。誰かのために自分が社会に出て、何かをして誰かに影響を与えないといけないと思うとすごく重く感じるが、僕の同級生はあなたがいてくれるだけで、自分たちがもっと頑張らなきゃなって思えるから、一緒に遊んでくれるだけでよいと言ってくれる。存在が、外の目の触れるところに行くということがよいと感じる。

今、民間でも、車椅子使用者用駐車場や、体が不自由な方優先の駐車場も多くなってきたし、それをアナウンスしてくれてるところもあるし、エレベーターなどもベビーカーや車椅子優先のエレベーターです、と言ってくれる。それは、みんなが入るときに、遠慮して一歩引いちゃうものだから、なかなか何基待っても乗れないような状況もあるから、ここは、そういう人たちを優先して乗せてあげてくださいというのを、市民、県民の人たちに広く伝えていく。

それが民間の人や、それから、会社にも広く伝わるように言っていき、自分たちが、そこに参加していくことで、企業もイメージが上がるというようになっていったらよいと感じる。

静岡は、比較的優しい人が多いので、ショッピングをしていると、すぐに「どれかお取りしましょうか」と声をかけてくれる人が割と多いが、まだハードの部分では物足りないところもある。電車に乗るときに、すごく親切で、駅員がずっとついてきてくれて、スロープを渡してくれる。いわゆるバリアフリーにはしてくれるが、今の大阪の万博の夢州みたいに地下鉄でも車椅子がいっぱい来ると、もうそれをやっていられないから、駅の切符売り場にも、ちゃんと車椅子用の切符を買えるところがあったり、それから、スロープを渡さなくても、もうホームと電車の隙間もなくして、どんどん車椅子やベビーカーが乗り込めるようになっている。そこが、バリアフリーではなくてユニバーサルデザインが実際に体験できるっていうところで、こういうものを出してって、どんどん社会を変えていく方向に行けるとよいと思う。

あと、もう一つ、骨子案の１のところで「理念の継承」がすごい堅苦しい言葉だと思う。変えていってもらえたらいいと思う。

（森川委員）

静岡は大好きで何回も来ているが、県民ではないので、今いらっしゃる身近な方々が考えるというのが一番いいと思っている。私がさっき定義をあまり変えなくていいのではないかと言ったのは、平成の頃からユニバーサルデザインについて調査をずっとされていて、ユニバーサルデザインという言葉を使っていることから、私が住んでいるところよりは、ユニバーサルデザインという言葉を使い知ってらっしゃる方が多いのではないかというふうに捉えたから。

自分なりにこれまでの県政世論調査結果などをグラフ化してみて、ここ最近では若い世代の方が興味を持ってよく理解をされている。県政世論調査の中では静岡の良いところをあげてくださいという設問に、「自然」「交通の便が良い」点もあるが、山本委員がおっしゃった「人が優しい」と取れる回答が挙げられていた。自然豊かというところを外して、順番を見てみたところで考えると、やはり「人柄が良い」、それが若い世代の方々が良いと考えている、これはイコールユニバーサルデザインの考え方にもつながると思う。このことを感じている20代以下の方々が結構多いことを考えると、土壌はできているのではないかと考えた。

そのためあまり定義は変えないでよいと申し上げたが、1行でキャッチフレーズのような感じで分かるというのがあれば一番よいと思う。県とか国とかが考える言葉は往々にして難しく聞こえるものが多い。分かりやすい言葉を一緒に考えていければよいと思っている。

（鳥原委員）

高齢者の方は、デバイスはよくは使えない、長文が理解しづらいなどで、言い回しが難しくなると読めなくなってしまう。子供たちの場合は、漢字が読めない、難しい字が分からない。

つまり、ユニバーサルデザインを情報だけに切り取っても、世代別で、非常に、それぞれ捉え方が違ってくる。このため、例えば、対象とする人たち向けに、表現を変えたらどうか。

行政の担当者の方はすごく頭をひねって考えているが、なぜ難しくなってしまうかというと、万人に伝わるように表現しようと思うとこうなってしまう。これを外国籍の人に訳して喋ったら、多分伝わらないと思う。日本語の分かりやすい表現を多言語による表現にする場合、やはり平易な言葉の方が伝わりやすい。

これは非常に極端な話なので年代別に変えるということは無茶な話になると思うが、例えば前提はこうだが、例えば子供たちに対してはこんな思いであるとか、高齢者の方にはどうかなど、サブテーマで分けられてもいいかと思う。

それから、私がユニバーサルデザインの講義をするときに必ず出すのは、今更ではあるが、ユニバーサルデザインとバリアフリーの違いの話をする。また、ユニバーサルデザインの様々な例を見せる。何か一つ具体的なものを目にしたり感じたりすると理解が深まると思うので、例えば今後県として啓発するための概要版であったり、ポスターであったり、多分そういったものを作られていると思うが、再度、ちょっとした、ユニバーサルデザインの概念が伝わるような好事例、図示のようなものを見せて表現すると、より感覚的に使っていただけるのではないかと思う。

（竹内委員）
静岡県が目指すユニバーサルユニバーサル社会、「（１）個性を尊重し共生する社会」「（２）ユニバーサルデザインの理念の継承」とあるが、私は逆のように感じた。静岡県が全国に先立って取り組んでこられて四半世紀経っているということだが、そこから今まで、築き上げてきたものであったり、経験であったり、県民の概念が変わってきたようなところもあると思う。一方で、もし四半世紀前と世界はもう変わってしまっているという現状があって、そのため、それを継承して、今の新しいステップに進みたい、25年前とは違うけれども、今はそれぞれ個性を尊重して共生していく社会がこれから求められている、というようなメッセージの方が届きやすいのかなと思う。
例えば、私どもの業界でも、様々な国籍の人が働いている。少し前までは、旅館で外国籍のスタッフがいると、おもてなしが足りないというような口コミをいただくことが多かった。これは、別に差別的なことではないが、着物を着た仲居さんがお部屋に入ってきてお茶を入れてくれるとか、お荷物を部屋まで必ず運んでくださるとか、そういうサービスができる施設とそうでない施設がある。今はもう時代も変わり、外国籍のスタッフがすごく頑張ってくれると、大変良いフィードバックをお客様からいただく。すごく一生懸命説明してくれたのが好感が持てたとか、そういうところにも人々の感覚も変わりつつ、アップデートされてきているという現実もあるので、時代の流れとともに変わってきたので、今ここを目指す、この先はここですよ、という順序の方が伝わりやすいのではないかと感じた。
その中で、さっき森川委員からも発言があったが、私は、ここはひとつ、キャッチコピーでもいいのではないか。私は、これを読んでいて、みんな違ってみんないい、それに尽きるなと思う。それを完全にいただいてしまうわけにはいかないと思うが、誰にでも分かって、でも、しっかりメッセージ性がある手法を、ここでひとつ取ってみるのも、ちょっと違った視点からよいのではないかと感じた。

（竹島委員）
年齢・性別、能力、言語・考え方など多様性のある私達がお互いの違いを認め合い、地域で自立した生活を送り、社会に参加ができる当たり前の社会がよいのではないか。

（小濱委員長）
今まで書いたものから、ちょっと組み砕いた新しい文言にするということで、今日フィックスすることはできないと思うが、このようなかたちでどうか。

（事務局）
いただいた意見を含めて検討させていただき、こちらで作ったものをまた皆様に見ていただく。

（小濱委員長）
ひとつよりもいくつかグレードを作っていただけた方が、答えやすいと思う。

（事務局）
何パターンか作って、お示しする。

（小濱委員長）
　山本委員にお聞きしたい。「自立」は「参加」から「活躍」の間のような感じがするが、「自立」とはどのように受け止められるか。

（山本委員）
　これも人それぞれ感覚が違うが、自立した生活ということを、自分が何でもかんでもやるのではなくて、人にやってほしいことを伝えて、サービスなどを使いながら自分が自立して社会に出るという、そういう意味で捉えている当事者が多いかと思う。

（小濱委員長）
　自立してはじめて、公平、平等というステージに立つと想定すると、使いがちな表現だが、障害のある方からすると、自立が当然というような感じの言い方をされるときついと捉えられるかと思ったため、お聞きした。

（山本委員）
　今、国の方向も、意思決定支援といって、当事者の意見をきちんと受け止めましょうというように動いている。ただ、それが家族や周りの方から、もう選択肢なしにこれでいいんでしょうと言われると、ついついうんと言いがちにはなってしまうが、やはり本人が望む暮らしは何がいいのか、それは選択の種類を示してもらって自分はこうしたいというように、選んでいくことが自立でよいのかと。

（小濱委員長）
　竹島委員が最後にまとめてくださったところには、ここのメンバーが言っていたキーワードもすごく含まれていたかと思う。

（小濱委員長）
　次に、指標案の議論についてである。今日は、案１がいいか案３がいいかということの決定というよりは、どちらかといえばこれがいいが、事例として、もう少しこういう言葉を入れた方がいいのではないかとか、そういう言い方で、ご意見をいただきたい。

（生川委員）
　この３つのうちでは案１と一応回答したが、それが必ずしも自信を持って一番よいかというと、難しいところがある。自分自身が行動しますかという問いかけのスタンスが案３、それに対して案1はご自身から見て、周囲が動いてるかという問いだが、結局どちらを主眼にするかになる。自分自身の行動として照らし合わせるのか、自分の周囲が動いていると感じるかという、どちらかというところをまず検討するところかと思う。

（藤原委員）
　どれでもよいと思う。

（ホン委員）
私も同じく、この三つともそのままでよいと思う。

（山本委員）
私は、具体的説明が補足されていて、案１でよいと思った。案３の方の場合、読み解くのにその人の感覚で、ちょっとした感じ方で変わってしまうのではないかと思った。表現の仕方でもっとよいものが加われば違うかもしれないが。

（森川委員）
最初のものは割とハードが多いとも思ったが、今ハート分野もプラスされて入っているとすれば、案1がよい。

（鳥原委員）
案３かと思った。最初に、この会に参加したときに、心のユニバーサルデザインというのは、僕にとっては、実はびっくりした表現だった。見た目ではなくて、気持ちの中でのユニバーサルデザインをどれだけ浸透させたいのかというような思いもあるのかなど、そういう設問があった方が答える側が意識をするのではないかと思った。

（竹内委員）
案１がよいと回答したが、元々いただいていた資料の中でハード・ソフト・ハートの３分野を一体に推進していくという考えがユニバーサルデザインの推進の骨子の中にあるのであれば、偏らないものの方が好ましいのではないかと思った。
論点がずれてしまうかもしれないが、観光庁が出している補助金等を使うときに、バリアフリー、ユニバーサルツーリズム関連の補助金は必ず枠に使い残しが出る。なぜかというと、何がバリアフリーなのか、何に使えるかというのが分かりにくいらしい。便利にできるようにするためにできることがあるのだが、県民側は、それが何なのか分からないようなものが結構あることが、この補助金が残る一番大きな要因にもなっているという話があった。例示があると、こういうものがユニバーサルデザインなんだと分かるので、より案1の方がよいと思うが、一方で、例が書かれていても、感覚が例示にどうしても引っ張られてしまう部分が悩ましいと感じる。ただ、総合的な形としては、私は1の方がよいと思った。

（小濱委員長）
案１が何票かあって、逆に案１がよろしくないというものはあまりない。案１が残った場合に、どうすればいいか。何人かは案３という人もいたので、案３の部分をもし案１に入れるとすれば、どのようなことを入れればよいか。先ほど委員の中で、案３は読み解くのにその人の主観が入るからぶれが生じるのではないか、それに対して案１は評価するぶれが少ないかもしれないが、書いてある事例によって引っ張られるという意見があった。
やはり指標というのは、その人によってのぶれがない方がいいと考えたときに、まず案１がその客観的な評価としてこれでよいか。今までよりも定量的なものを取ろうと思ったときには、気になると

ころはどこか。その観点から伺いたい。

（生川委員）
　実は無意識のうちにユニバーサルデザインというのは、結構浸透しているのではないか。最近は外国の方が来て、翻訳アプリを使用して会話する。これが自然のコミュニケーションになっている。そのため、無意識のうちに実はユニバーサルデザインコミュニケーションが成立していて、観光面でまちづくりをしている人にとっては、それもユニバーサルデザインといえるのでは。ユニバーサルデザインはスマホ一つでかなり進化している。

（小濱委員長）
　事前に聞いておきたいが、今のようなスマホなど色々なものを含めての聞き方でいいのか、それとも県の事業として聞きたいのか。意識として上がっていれば、スマホの活用など全部を含めてもよいのか。

（事務局）
　そこは中でまた検討するが、県の事業に限定しているわけではなく、社会全般としてのユニバーサルデザインというイメージでは書いている。

（小濱委員長）
　ユニバーサルデザインを意識している県民が増えていれば喜ばしいという認識か。

（事務局）
　実際、ユニバーサルデザインが浸透しているかどうかである。

（藤原委員）
　客観的な話というなら案１がいい。案３だと自分自身の行動をオープンにしていますかという、限定されているような話になってしまう。案１には違和感は感じない。

（ホン委員）
　案１は周りを見てどう感じているのかで、案３は自分がやっているか。そのため、県の指標の目的によってどちらを選ぶかだが、案１は質問が短く、下に例示があるので、分かりやすかった。

（山本委員）
　細かい話だが、お年寄りという言い方は、最近は高齢者というのが一般的であるが、なぜお年寄りなのかと感じたところ。
　もし、心のユニバーサルデザインというところを一緒にするとしたら、案１の例示のハード、ソフトの例の後に（建物や道具の工夫）、ハートの例の後に（心のユニバーサルデザイン）というように、間で一度区切ったほうがよい。

（森川委員）
　鳥原委員がおっしゃったように、この案３が浸透したり動きがある方が、ユニバーサルデザインが浸透するんだろうと思う。
　だが、全体的に考えて、今調査をするとなるとやはり案１だと思う。これを定量と考えるのは私が研究している分野では判断が難しい。例えば、ユニバーサルデザインの例で、多機能トイレで１個でも浸透してると思えば１を付ける人もいるのだが、他は配慮していないと思えば、多機能トイレはあるものの２を付けるか３を付けるかで迷うところではある。ただ、全部対象物を書くわけにはいかず、複数選択するわけにはいかないという条件のもとであれば案１でもよいという気がする。

（鳥原委員）
　メディアユニバーサルデザインの立場からは、伝わるとか受け取るという観点で話をする。そういう立場からすると、案３がよいと思う。もし案１にするのであれば、例えばメディアで見やすくなったとか、分かりやすくなったとか、そんな表現を加えていただくとよいと思う。

（竹内委員）
　私はここにＱＲコードがついていて、詳しいユニバーサルデザインの例はこちら、と示すようなものが一番よいと思った。例示を書くとそれに引っ張られてしまうが、ここには書ききれない。ネットで回答できるなら、リンクが貼ってあって、そこに全部紹介されているようにすればよいのではないか。今、高齢の方でも、もちろん障害がある方でもスマートフォン等を使えるようになっているので、そういうもののほうが、それこそデザイン的にはユニバーサルだと思う。

（事務局）
　県政世論調査自体は郵送でお送りするが、回答はインターネットでもできる。ＵＤの設問は１つだが調査全体の設問数はもっと多いため、調査を行っている担当課との調整になるが、なかなか難しいかもしれない。

（竹島委員）
　案１でよいと思うが、事例がハード・ソフト・ハートでたくさんあるので、整理した方がよい。
多機能トイレはバリアフリートイレ、お年寄りは高齢者、マタニティは妊産婦に置き換えるのがよいのではないか。マタニティの方は妊産婦だけでよいか。子育て中の方は除外になるのか。

（小濱委員長）
　森川委員が言われたように、調査するとなったときに、これを定量とは言い難いというのは、そのとおりだと思った。
　ハード、ソフト、ハートからまんべんなく例を出したときに、例えばハードだけに偏っていたとしてもよいのかもしれない。つまり、選択肢は浸透しているかどうかではないといけないのか。それともこの中から五つ以上あるなど、どれぐらいかというボリュームを聞くことはできないのか。

（事務局）
　できなくはないと思う。ただ、資料3-4の調査結果のＱ11でそれに近い調査をさせていただいたが、その中でユニバーサルデザインが浸透したと感じないという回答が一番多かった。これは、現在の成果指標と状況が同じであり、このような回答にならないように、選択肢を作成した。

（小濱委員長）
　今の書き方だと、浸透したと感じないという人が増えたか減ったかしか分からないような調査だが、それと同時に、例えばこの中から、「自分は何個以上感じるものがある」という人の度合いが増えているかどうかをみることができる。
　定量にならないというところも拭えるし、ユニバーサルデザインを見つけていない人の数は変わらないけれど、見つけた人の数が上がっている、若年層は結構見つけている人の量が多いが、年配の人は…というようなことも情報として拾えるというようなことの利点もあるかと思った。

（森川委員）
　Ｑ11は調査方法と質問事項や対象等が明確に分からないのでうまく答えられないが、皆さんがおっしゃってるように選択式がよいと思う。Ｑ11の調査は県政世論調査とはちがう調査なので、比較はできないが、小濱委員長のおっしゃったようにいくつかから選ぶのもいいし、それらを考えると案３でもできるかもしれない。申し訳ないが現時点では答えが出ない。

（小濱委員長）
　議題２は、案１が多めであるが、その中で色々とご意見をいただいてる。議題１と一緒に事務局の方で考えて、提案してもらえればよいと思う。

（事務局）
　議題１についてもこちらで検討した結果をまたフィードバックする。

（小濱委員長）
　案３はもう無しというわけではなかったが、案１が全く駄目だという人は、少なかった。それにしても、この例の出し方については、一考が必要ではないかということと、例の出し方の中から１個でもあれば「１　浸透している」を選んでしまうかどうかというところも、言葉とか出し方であるとか、選択肢のもたせ方で、もう少し工夫すれば、よりよい設問になると思う。知らない人に対して、どこまでをユニバーサルデザインとして評価してほしいのかということを何らかのかたちで補完するのがよい。